

2019年度 秋学期・第4クォーターの授業評価を終えて

人間学部長 宮崎牧子

2019年度 秋学期・第4クォーターの学期末に実施された学生による授業評価アンケートの集計結果を報告いたします。授業評価の実施にあたり、ご協力いただきました学生、教員、職員の皆様に感謝申し上げます。

アンケートの設問 Q1～Q14 について、全体としての回答結果の平均点をみます(10頁)。今年度春学期の平均点と比較したところ、高くなっているか、ほぼ維持している状況でした。全体としては、教員が授業改善に向けて努力しており、学生はその結果として、学修への興味や関心が向上している結果と受けとめることができます。

そこで今回は、筆者の日ごろからの関心事である学生の「事前学修・事後学修」という視点で、Q14「この授業のための事前学修・事後学修に何時間とりくみましたか 授業1回当たりの平均学修時間を選択してください」を取り上げて、集計結果を見ていくことにしました。

まず、I類と各学科の分析結果です。「121分以上」、「61～120分」では、春学期と秋学期の平均点を比較すると、学修時間が増えている科目あるいは学科が多くなっていました。ここで、注目しておくことは、I類の留学生科目と第II類科目(学部共通)で、どちらも「121分以上」と「61～120分」をあわせて、8割を超えていることでした(31頁)。このような結果を受けて、該当する科目のシラバスを参考にしたら、事前学修・事後学修の指導のやり方にヒントがあるのではないかと思います。

つぎに、授業規模の分析結果です(42頁)。授業規模が大きくなるにつれて、事前学修・事後学修を「全くしない」の割合が高くなっています。その点を、改めて指摘しておきます。

さらに、学年でみる(48頁)と、「全くしない」が4年生でも1割存在していることです。1年生では12%であることから、1割程度の学生は、学修習慣がないまま4年間の大学生活を終えていることでもあるといえます。

最後に、学部でみる(14頁)と、「全くしない」は、地域創生学部7.2%であったのに対して、他の5学部は1割を超えている結果でありました。

今後いっそう教育の質・単位の実質化が求められていくことをふまえると、学生がどのように事前学修・事後学修をしたらよいのかを具体的に示しながら、1年ごとに自分から考えて事前学修・事後学修することができるように育むことにあるでしょう。これは、教員個人はもとより、学科や学部という組織でも検討していくことと受けとめました。そして4年生になっても、事前学修・事後学修を「全くしない」と回答する学生を減らしていくためには、教職協働なくしては実現しないことでもあります。

I類や学科のFD活動において、本報告書を積極的に活用していただき、授業改善の取り組みが進んでいくことを切に願っております。